ユダヤにおけるバプテスマのヨハネの働き
（主を証しする者の模範）

ヨハネ福音書3:22-30
【新改訳2017】

3:22 その後、イエスは弟子たちとユダヤの地に行き、彼らとともにそこに滞在して、バプテスマを授けておられた。
3:23 一方ヨハネも、サリムに近いアイノンでバプテスマを授けていた。そこには水が豊かにあったからである。人々はやって来て、バプテスマを受けていた。
3:24 ヨハネは、まだ投獄されていなかった。
3:25 ところで、ヨハネの弟子の何人かが、あるユダヤ人ときよめについて論争をした。
3:26 彼らはヨハネのところに来て言った。「先生。ヨルダンの川向こうで先生と一緒にいて、先生が証しされたあの方が、なんと、バプテスマを授けておられます。そして、皆があの方のほうに行っています。」
3:27 ヨハネは答えた。「人は、天から与えられるのでなければ、何も受けることができません。
3:28 『私はキリストではありません。むしろ、その方の前に私は遣わされたのです』と私が言ったことは、あなたがた自身が証ししてくれます。
3:29 花嫁を迎えるのは花婿です。そばに立って花婿が語ることに耳を傾けている友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。ですから、私もその喜びに満ちあふれています。
3:30 あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません。」

【祈りながら考えよう】

（１）バプテスマのヨハネの弟子たちは、ヨハネに何を訴えていますか。なぜですか。
（２）29節の「花婿」と「花婿の友人」のたとえの意味を説明して下さい。
（３）30節の「あの方は盛んになり私は衰えなければなりません」とは、どういう意味ですか。

【解　説】

（１）２つの集団によるバプテスマ

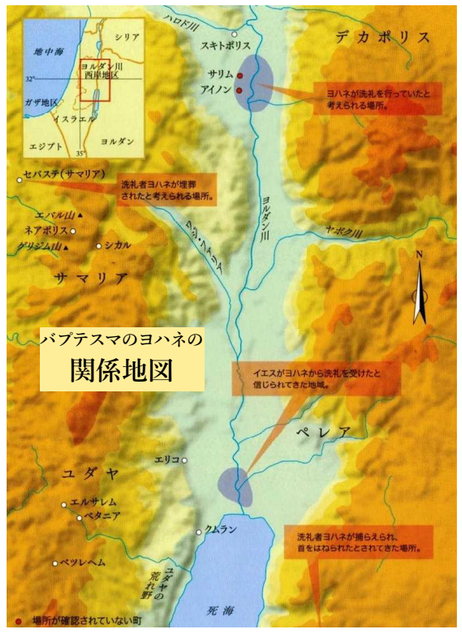
イエスは弟子たちとエルサレムを離れ、ユダヤの北の地方に滞在して、救いの福音を伝え、教えを聞いて信じた者たちにバプテスマを授けておられた。

ヨハネ4章2節を見ると、バプテスマを授けていたのはイエスではなくイエスの弟子たちであった。

一方、バプテスマのヨハネは依然として悔い改めのバプテスマを授けていた。彼はヨルダンの東のベタニア（1:28）からサリムに近いアイノンに移動していた。そこには水が豊かにあったので、バプテスマには最適の場所であった。

バプテスマのヨハネが以前ヨルダン川でバプテスマを授けていた時は、「エルサレム、ユダヤ全土、ヨルダン川沿いの全地域の人々」（マタイ3:5）が来ていたし、その中には、パリサイ人やサドカイ派の信者（マタイ3:7）が大勢来ており、またローマの兵士たち（ルカ3:14）も来ていた。

ところが、バプテスマのヨハネが、主イエスのことを、「見よ、世の罪を取り除く神の子羊」（ヨハネ1:29）と言って、証しを始めると、どんどん主イエスの方へ行ったため、ヨハネの弟子たちは内心おもしろくなかった。そこで、自分の先生にこう言って訴えた。



（２）どちらのバプテスマがすぐれているのか

《ところで、ヨハネの弟子の何人かが、あるユダヤ人ときよめについて論争をした。
彼らはヨハネのところに来て言った。「先生。ヨルダンの川向こうで先生と一緒にいて、先生が証しされたあの方が、なんと、バプテスマを授けておられます。そして、皆があの方のほうに行っています。」》（25-26節）

ヨハネの弟子たちが、あるユダヤ人たちときよめについて論争になった。ここで言う「きよめ」とは、おそらくバプテスマのことと思われる。その議論は、「ヨハネのバプテスマはイエスのバプテスマよりまさっているか」というものであったようである（W･マクドナルド）。

ヨハネの弟子たちの中に、浅はかにも、ヨハネのバプテスマにまさるものがあるはずがない、と主張した者たちがいたのかもしれない。ヨハネの人気が落ちて来たことで、弟子たちが苛立（いらだ）っていたのであろう。

彼らはヨハネのもとに来て言った。「先生。もしあなたのバプテスマのほうがまさっているなら、どうしてあれほど多くの人々があの方イエスのところに行くのでしょう」と訴えたと思われる。

（３）嫉妬心に対する解毒剤

弟子たちの訴えに対して、バプテスマのヨハネはどう答えているか。そこに彼の謙遜な姿が表されている。

第1に、彼はこう答えている。「人は、天から与えられるのでなければ、何も受けることができません」この彼の答えは何を意味しているのか。

「これまでの働きで、私がなし得たことはすべて、神から受けたものである。私は、天から与えられたもの以外には何もないのだ。」これは、神の主権性の告白である。私たちも、ある場合には神の主権性を認める。しかし、どんな場合にもそれを認めているかが問題である。

他の人が神からすばらしい賜物を与えられて、大きく用いられている時、それに対して妬み心を抱くのは、神の主権性への侵害である。私たちは、どんな場合にも、神の御心でなければ、霊的なすばらしいみわざがなされることはないということを知らなければならない。

《『私はキリストではありません。むしろ、その方の前に私は遣わされたのです』と私が言ったことは、
あなたがた自身が証ししてくれます》（28節）

ここに、彼が自分の使命をよく自覚していたことが分かる。自分がどういうものであるかということが分からない人は、とかく傲慢になる。ヨハネは、民衆がイエスの方に移っていくのは神がそうさせているからだと説いた。

そして自分の使命はあくまで準備的役割であることを再確認すると共に、弟子たちこそ、師である自分の使命を理解し、その証言者でなければならないと、諭すように語っている。

ヨハネの弟子たちも、イエスの証言者として立たされていることを自覚する必要があった。それは、彼らがやがてイエスの弟子となって人生を送るはずだからである。

パウロは、コリントの教会の人々に対してこう言っている。「いったいだれが、あなたをほかの人よりもすぐれていると認めるのですか。あなたには、何か、人からもらわなかったものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。」（Ⅰコリント4:7）。

誇る人の多くは、この点がよく分かっていない。頭がよいということにしても、努力できるということにしても、ある種の才能を持っているということにしても、どれ１つとして自分の力で得たものなどない。その自分の力というものすら、自分で得たものとは言えない。みな与えられたものである。そういうことが分かると、自分の分も、またおのずから分かる。

「今まで何度も何度も、私はキリストではない、メシヤの道を備えるために遣わされた者にすぎない、とあなたがたに言ってきたではないか」「なぜ私のことで議論するのか。なぜ私をめぐって徒党を組もうとするのか。私が重要なのではない。私はただ、人々が主イエスに注目するようにしているのだ」とヨハネは言う。

（４）花婿に仕える友人

第２に、バプテスマのヨハネが弟子たちに答えていることは、このことである。

「花嫁を迎えるのは花婿です。そばに立って花婿が語ることに耳を傾けている友人は、
花婿の声を聞いて大いに喜びます。ですから、私もその喜びに満ちあふれています」

ヨハネは自分の使命を、婚礼の席にいる花婿の友人にたとえている。友人とは、今日の日本での結婚式で言えば、証人とか、仲人に当たる。花婿はキリストを指しており、ヨハネはその友人にすぎない。主役はあくまでも花婿であって、花婿の友人ではない。花婿の友人は花婿を引き立て、花婿の結婚を助け、花婿が花嫁と結婚して、喜びの生活に入れるようにする役割を果たす。

すべてのキリスト者は、この花婿の友人である。私たちキリスト者は花婿に仕えるその友人のように、花婿であるキリストに仕える者たちである。そして、花婿が花嫁と無事ゴールインする時、その役目を果たして喜ぶように、十字架上で成し遂げられたキリストのみわざがこの世界に生きている人々に適用され、多くの人々が救われて、世の終わりに天上において子羊の婚宴が開かれる時を待ち望みつつ、主に奉仕していく者たちである。

ヨハネは弟子を失うことを不幸な事態だと思ってはいなかった。花婿の声を聞くのはヨハネにとって大きな喜びであった。イエスにすべての注目が集まっていることでヨハネは満足した。キリストが人々から賞賛され、尊敬を受けるのを見て、ヨハネは喜びに満たされた。

（５）あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません

最後に、バプテスマのヨハネは、実に驚くべきことを言った。

「あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません」

ヨハネの徹底したしもべとしての自己理解とその告白である。ヨハネは、不満顔の弟子たちに対し、キリストがますます威厳のある方としてあがめられ、自分は次第に人気を失っていかなければならないということは、正しく、適切であり、必要なことであると告げている。

ヨハネは終始、人々の目を主に向けようとした。そして主イエスの真価（しんか）を気づかせようとした。そうする一方で、自分が目立ってはいけないことをヨハネは認識していた。